

### 10月 業務抄

- 5日 香川県人事委員会勧告
- 6日 丸亀市教職員協議会評議員会
- 10日 全日教連第7次中央要請行動 (文部科学省・財務省・デジタル庁)
- 14日 全日教連専門部会 (WEB)
- 19日 教育振興・福祉事業推進委員会 令和4年度第2次論文審査会
- 22日 第3回会長・局長会議 web会議
- 28日 「かがわ教育の日」のつどい
- 30日 香川県知事・香川県議会要覧



左のQRコードを読み取って、会員登録をお願いします。

### 会員の声

生成AIはもうすでに教育の現場に深く関わってこうとしています。他県では、さかんに研修会等開催されていると聞きます。先生方の中には実際に操作をして体験されている方もいるのではないのでしょうか？授業・校務への活用も大きな可能性を秘めていると感じます。しかしながら、SNSと同様、プライバシーの問題やリスクも考えておかないといけないと思います。「生成AIはあくまでも道具、使うもののモラルが試される」と言われています。皆さんは生成AIについてどうお考えですか？御意見・ご質問をお待ちしています。抽選で図書カードをプレゼントいたします。

【10月号 図書カードプレゼント】大川 S・E先生

### 令和5年度 教育シンポジウム

## 崇高な使命を有する 教職の魅力を見出す

パネリスト: 戸ヶ崎 勤氏 (埼玉県立川口高等学校 校長), 丸山 洋司氏 (公立学校共済組合 理事), 朝石 要一氏 (日本教育文化研究所 所長)

コーディネーター: 日本教育文化研究所 所長 千原 大志 先生

令和5年11月18日(土)9:20~11:50

お申し込みはこちら (申込締切11月13日)  
<https://form.dr-seminar.jp/seminars/pxeaj/1118webinar>

配信方法: Web配信 (全国各地でも参加可能)  
 参加方法: 事前申込制、会員以外の方も申込可能です  
 連絡先: kyoubun@ntfi.net 03-3262-1859

主催 日本教育文化研究所

## 全日本教職員連盟 第2回専門部会 開催



10月14日(土)ZOOMによるWEB会議にて、全日教連の第2回専門部会が開催された。香教連からは、高木委員長、養護教諭部会に、土山由美先生(三観)、幼児教育部会に、瀬戸美奈子先生(高松)、八重彩先生(高松)、安富慶幸先生(高松)が参加した。

学校事務職員部・栄養教諭、学校栄養職員部・幼児教育部・女性教職員部・高等学校部・管理職員部・特別支援教育部の8つの部会から構成されており、専門的な立場から教育の正常化や教育環境・給与勤務条件の改善に取り組むとともに、教育専門職としての意識を高め、資質の向上を図ることが目的としておる。

それぞれの部会において、活発な意見が出され、令和6年度の専門部活動の方針案と要望案が取りまとめられた。

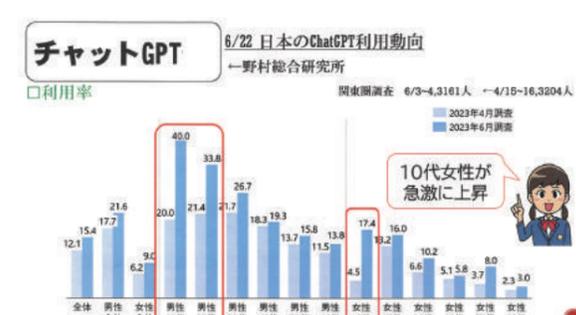
## 生成AIが教育現場にやってくる！チャットGPTって何？

チャットGPTは、OpenAI社が昨年末に発表した製品で、生成AI(人工知能)には他にBing Chat(マイクロソフト)、Band(グーグル)等もある。

ある単語や文章の次に来る単語や文章を推測し、「統計的にそれらしい応答」を生成する。10代の利用率が高く、野村総合研究所の調査(関東圏)では、男性10代が4割と4月↓6月調査の2ヶ月で倍増。10代女性も4倍近く伸び、教師の側にも一定のAIリテラシーが必要な状況だ。

5月のG7広島サミットで、AIに関する国際的なルール作りに向け、「広島AIプロセス」が合意された。児童生徒や教師を含め、社会に急速に普及しつつある

文部科学省初等中等教育局から7月4日、「初等中等教育段階における生成AIの利用に関する暫定的なガイドライン」が発出された。全世界で物議を醸している「チャットGPT」への素早い対応だ。学校現場はどう対応すればいいのか？



現状もあり、一定の考え方を国として示す必要から、今回のガイドラインに繋がった。国は、教育活動や学習評価の目的を達成する上で、生成AI利用の「不適切な例」と「活用例」を暫定的に提示している。

「コンクールの作品やレポート等の応募・提出」は、もちろん、「教師によるコメント」に「児童生徒の学習評価」に用いる等は不適切。活用例は、「グループの考え方をまとめたり、アイデアを出す活動の途中段階

### チャットGPT 不適切な例

- 生成AIの性質やメリット・デメリットに関する学習が不十分
- コンクールの作品、レポート・小論文等 → 生成AIを用いて応募・提出
- 詩や俳句の創作、音楽・美術等の表現・鑑賞
- 調べ学習での安易な使用
- 教師によるコメント・評価 → 生成AIから生徒に回答
- 定期考査や小テスト等で子供達に使わせる
- 児童生徒の学習評価 → AIからの出力のみをもって行う
- 人間的な触れ合いの中で行うべき教育指導を実施せずに、安易に生成AIに相談させる

### チャットGPT 活用例

- 生成AIが生成する、誤りを含む回答を教材として使用
- 生成AIをめぐる社会的論議について、議論の素材として活用
- グループ学習、討議の際、不足する視点の発見や議論の深化に
- 英語の相手、単語リストや例文リストの作成に活用、外国人児童生徒等の日本語学習のために活用
- 自作した文章を生成AIが修正 → 自ら推敲 → ワードソフトの校閲機能を使って提出
- 生成AIを用いた高度なプログラミングを行わせる
- 生成AIを活用した問題発見・課題解決能力を積極的に評価する観点からパフォーマンステストを行う

「最後は教職員自身がチェックし、推敲・完成させることが必要であることは言うまでもない」と少々おせっかいに感じられるほど具体的に示されている。

### チャットGPT 「文章の指教」で判別

100%判別

「文章の指教」で判別

- 判別するポイント
- 「OOOが、〜が〜」といった並びが目立つ
- 「OOOは」のあとに語彙が打たれやすい
- 「本論文は」など「本」といった単語が使われやすい

特別じゃない特別支援教育を⑤

今回紹介する本は、安居院みどり・萬木はるか編集、日部由刈監修「学校で困っている子どもへの支援と指導」(学苑社)です。

タイトルを見て、皆さんは「？」と思われませんでしたか。私は一瞬どちらなんだろうと思いましたが、「学校が困っているのか、子どもが困っているのか」当然、後者です。

【はじめの部分より】

これまでに発達に特性のある子どもへの支援や指導をテーマとしている書籍の多くが小学校低学年を中心とした、特に行動面での困難が目立つ子どもを対象としていました。本書では、一見困難さがわかりにくい小学校高学年から中学生の「思春期」を主な対象としているところに特徴があります。また事例を4コママンガで紹介しているので読みやすいです。

2012年の文科省の調査によると、通常の学級に在籍する「学習面又は行動面で著しい困難を示す」子どもの割合は6.5%。学年別にみると小一が最も多く9.8%、中一で4.8%、中三で3.2%でした。一見すると、学年が上がれば「困難を示す子ども」は減っていくようです。これは発達に特性のある子どもの多くが、困難を克服して学校生活に上手に適応できるようになったからでしょうか？

最近の研究によると、発達に特性のある子どもの多くは、青年期になると困難を感じても、周りに悟られないようにマスクやカモフラージュをするようになることがわかっています。自分を押し殺して周囲に合わせることで、周りからは困難が減ったように見えるだけで、本人はますますストレスを溜め、自己肯定感が低下して・・・。

エピソードごとに感じたことや戸惑いや疑問を共有しつつ、子ども本人の困り感に焦点を当てていく書き方で、皆さんが「ある！ある！」と感じながら読んでいただけることでしょう。

【本文より】

### ●態度がなっていない！

授業の開始時には姿勢も良い生徒。しかし、時間の経過とともに肘をついたり、椅子からずり落ちたり、姿勢が崩れてしまう。朝の会などの際、ふらふらと体が左右に揺れ、落ち着きがない。

整列の際、何度注意しても前の子どもに近すぎる距離に立ち、ふざけているように見える。授業中は近くに行つてそつと声をかけるが、集団行動の中や真剣な話題の最中となると「だらしがない」「緊張感が足りない」「ふてぶてしい」と感じてしまう。

●背景にある特性を考える

固有感覚、平衡感覚、触覚といった「感覚」のアンバランスが関係していることがあります。これら3つの感覚に視覚、聴覚を加えた5つの基礎感覚が土台となり、姿勢、筋力、眼球運動のコントロール、ボディイメージ、目と手の協応、注意の持続、言語機能などが発達していきます。一人一人の持つ感覚の受け止め方の特徴は「感覚特性」と呼ばれています。「感覚特性」は生まれもったものであり、無くしたり、直したりすることはできないものです。

●支援・指導のヒント

生まれもった感覚の受け止め方の違いを「直す」ことはできません。まして気合いや根性、心がけでどうにかなるものでもありません。大切なことは、その場に適切な態度をどうにか取らせることよりも、これらの感覚のアンバランスを想像し、ある程度は許容してその子が本来もっている力が発揮される機会を広げることです。他の子どもの前で注意を受けてばかりいることで自己肯定感が下がり、何に対しても自信をなくしてしまう。恥辱感から反抗的な態度をとってしまうなどの二次障害を防ぐ視点が、教師の側に必要です。

ただし・・・

あとは本書をお読みください。

学校で困っている子どもへの支援と指導

山田 浩史 著